

崇峻天皇御書

人身は受けがたし、爪の上の土。人身は持ちがたし、草の上の露。百二十まで持ちて名をくたして死せんよりは、生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ。中務三郎左衛門尉は主の御ためにも、仏法の御ためにも、世間の心ねもよかりけりよかりけりと、鎌倉の人々の口にうたはれ給へ。穴賢穴賢。蔵の財よりも身の財すくれたり。身の財より心の財第一なり。此の御文を御覧あらんよりは心の財をつませ給ふべし。

(一一七三頁)

本抄は、建治三(一二七七)年九月十一日、日蓮大聖人御年五十六歳の時、身延の地から鎌倉在住の四条金吾に与えられた御手紙です。題号は、本抄の後半に崇峻天皇の故事について説かれていることに由来します。

本抄執筆の三方月前、大聖人様の弟子・三位房と、極楽寺良観の庇護を受けていた竜象房との間で問答が行われました。このとき四条金吾は、その場に同席しただけで発言すら一切しなかつたにもかかわらず、何者かが「金吾が徒党を組み武力をもつて乱した」と、主君・江間氏の耳に入れたのです。金吾は主君の怒りを買って謹慎を命ぜられるとともに、法華信仰を捨てる旨の起請文を書くよう迫られました。ところが程なくして、主君は病床に伏すようになり、謹慎中の金吾に治療を命じたのです。

以上の経緯を四条金吾が大聖人へ報告したことに對し、種々教導されたのが本抄です。特に、ここでは四条金吾が武士であったことから、武士として、男として、あとに恥を残すような生き方をしてはならないと大事な事を教えられているのです。

即ち、人は苦境に陥ったとき、その原因を社会や周りの人に求め、その悪口をいうことによつて慰めを見出そうとすることがまあります。まして、四条金吾の場合、たしかに彼に罪はなく、ひとえに周囲の怨嫉によつて、苦難に遭遇しているのではありませんが、しかし、讒言をした同僚を憎んだり、主君を恨んだり、世間に向かつて愚痴を言ったりするのは、却つて自らの恥を残すのと同じだと、戒めておられるのです。しかし、このことはなかなか至難のことで、例えば普段は立派なことをいつても、自分自身が何かに巻き込まれたりして嵐の中に身をさらすにいたると、相手を憎んだり、周囲の人々を怨んだりするものです。しかし、一切は自らの内にその原因があるのであり、三世の生命の上から考え、自身の宿業をよく見つめていく事が大事であり、さらに、これを試練として自己を磨き、より成長を期することこそ、真実の人間の生き方であつて、これこそ真に仏法を實踐する人の在り方なのであると、御指南になつていゝのです。

内容は、正義感の強い半面短気であつた四条金吾を心配され、無用な嫉妬や恨みを買うことのないよう、出仕の際の服装や言葉遣い等、細かく指導をなされています。そして本日の拝読箇所では、蔵の財や身の財よりも心の財を積むことが第一であることを示され、続いて、天皇の身でありながら臣下に殺された崇峻天皇の史実から、軽挙妄動(軽はずみな行動)が身を亡ぼす結果となることを戒められています。最後に、孔子・周公旦や不輕菩

薩の例を引かれ、世法即仏法の要諦を示されて本抄を結ばれているのであります。

そこで拜読の御文に於いては先ず、涅槃經の譬えの文を引かれて「爪の上の土」「草の上の露」と仰せられています。人間として生まれることは至難のことであり、極めて稀であり、それができたとしても一生は僅かな期間です。たとえ長寿を得たとしても、大聖人の仏法に値わなければ、罪障消滅も叶わず成仏も遂げることもできません。

私たちは「生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ」との御金言を銘記し、法華講員として篤き信心を貫いていくことが肝要ではないでしょうか。

されば、人生は長く生きたことが尊いのではなく、短くとも、それをいかに内容あるものとするかが大切であると仰せでなのです。つまり、どれだけ長生きしたかではなく、どのようにして人生を全うしたかが肝要なことだと仰せなのです。

即ち、仏法の原理からいえば、寿命の長さは過去の宿命によるものであって、事実、自殺という特殊な場合を除いては、人の寿命はその人自身にも、どうにもならないのであり、たとえ百二十歳まで長生きしても、汚名を残して一生を終るよりも、生きて一日でも名をあげる事、即ち、内容を充実したものにすることが大切であることを教えられているのです。即ち、「名をくたして」「名をあげん事」と申されているのは、世間的な名聞ということではなく、人間としての尊さをいわれているのです。

それは後の「蔵の財・身の財・心の財」のお言葉から、充分に理解されるところです。故に、中務三郎左衛門尉（四条金吾）は主君のためにも、仏法のためにも、世に対する心がけについても非常に立派であったと、鎌倉の人々から称えられるようになりなさいと、仰せなのです。

そして次に、人生において大切なものは何であるかを、簡潔な言葉で御教示されているのが、「蔵の財よりも身の財すべからず。身の財よりも心の財第一なり」の御文であります。

先ず、「蔵の財」とは、文字通り、物質的な富であり、金銭等であります。物質的な富は自分の外にあるものです。人間としての幸福という観点からみると、一つの条件にはなりうるかも知れませんが、それは浅く、はかないものにすぎないのであり、むしろ、物質的な豊かさが、本当の人間としての豊かさをそなっている場合も少なくありません。それ故にそのような「蔵の財」よりも「身の財」が勝れていると、仰せなのです。

また次に「身の財」とは、肉体の健康や、身についた技術、あるいは社会的な地位等がそれに当たりますが、これらも、幸福への条件の一つではあります。しかし、それが全てではなく、かえって、これらを追いかけて求めた結果は、人間としての貧しさをもたらす場合が少なくありません。まして、死んでしまえば、蔵の財と同様、身の財も、何の役にも立たないと仰せなのです。そして、その身の財よりも、心に積んだ財こそが第一の財であると申されているのです。

されば、その「心の財」とは、自己の生命の内に築いた豊かさであって、それは即ち

人々のために、どれだけ尽くしたか、自己を精神的・人間的にどれほど成長させたか、ということであります。そして、より根本的には、永遠の仏法を自身の身の内に体得すること、これのみが、死にのぞんでも悔いのない財となるのであり、人間としての揺るぎない幸福と、他の人々に限りない暖かみを与えていく、真の豊かさをもたらしてくれるのです。したがって、何よりもめざまさなければならぬのは「心の財」を積むことである、仰せなのです。故に「身の財」といい「蔵の財」といっても、「心の財」を豊かにするための手段にはかならないことを弁えていくことが大事な事なのです。それ故、この手紙を御覧になられた以後は、心の財（心の財の根本として強い法華経への信仰を教えられているのです）を積んでいきなさい。と御指南になつていたのであります。

四条金吾に与えられた他の書状でも、大聖人は四条金吾殿御返事（一四〇七頁）に「ただ心こそ大切なれ（中略）はげみをなして強盛に信力をいだし給ふべし」と仰せです。また、総本山第六十七世日頭上人は「最も大切な財は三世十方に通ずる真実の教法、すなわち妙法蓮華経であります。故に、妙法への強い信心が、まことの心の財なのであります」（妙法七字拜仰下八一）と御指南なされています。

私達がこれまでの過去遠々劫、苦悩の人生を流転してきたのは、妙法を知らなかつたゆえであり、法華経に巡りあつた今生においてこそ、迷いの根源を断ち、現世を安穩にし、後生善処の因をつくつていかなければならないのです。

持妙法華問答抄（三〇〇頁）には「あながちに電光朝露の名利をば貪るべからず」の言葉や、また「須く心を一にして南無妙法蓮華経と我も唱へ、他をも勧めんのみこそ、今生人界の思出なるべき」との仰せの御文がありますが、私たちは此の大聖人の仰せを、特によくよくかみしめて己が生命に刻みつけたいものであります。

また、本抄末尾（一一七四頁）に「教主釈尊の出世の本懐は人の振る舞ひにて候ひけるぞ」（一一七四）とございますが、私たちは、正法の信仰者としてふさわしい言動を常日頃から心掛け、人々の信頼を得られる人格者でありたいものです。信頼によつて培われた人間関係は、必ず折伏のよき縁となります。一歩でも二歩でも、広宣流布へ向けた折伏の歩みを進めるべきです。

されば大聖人は拜読の御文に「此の御文を御覧あらんよりは心の財をつませ給ふべし」と仰せられています。今日からさらに信心を深めるべきです。自行化他の確実な実践により、心の財を積み重ねてまいりましょう。

妙法を離れた今生の名聞・名利は、ただ今生限りのものにすぎないのであり、たとえ、位人臣を極め、天下に栄耀栄華を誇つたとしても、それは六道に輪廻する無常の営みにしかすぎないので。人間として稀なる生を受け、しかもあいがたき仏法にあり、妙法を信受できたということは、本有常住の妙法（正法の教えである南無妙法蓮華経）に我が身を任せしめる千載一遇の機会に巡りあつたということでもあります。人間として生まれながらに、自行化他にわたる仏道修行を實踐することができのです。しかも、「後

世の弄引」(三〇〇頁)として、妙法信受の因が、後世における成仏の果を決定するのであります。これほどの偉大な功德力が他にありません。人間であつて初めて実践が可能な、妙法信受、即ち自行化他にわたる妙法の実践を貫くことが肝要であります。

不動の人生の基盤は、生命の永遠を覚知して、「妙法を唱え奉る」即ち御本尊様へ真剣な唱題を重ねていくことが肝要であります。御本尊様には一切の人々に、盤石の人生を築く力を涌现させる根源の力が具わっております。しかし、その力は、祈る側の「信力・行力」によることを知らなければなりません。御本尊様は「皆成仏道(衆生が皆成仏する)」の御法であり、絶対の「仏力・法力」を具えられているのです。しかし乍ら、祈る側が「志の程・無下にかひなし」では、仏道を成就することはできないのです。

日如上人観下は「自分一人だけの幸せを求める信心、すなわち利己的な信心は、大聖人様がお示しあそばされた自行化他にわたる信心にはほど遠く、これではかえって成仏を妨げることになるのであります。したがって私どもの信心にとつて、謗法の害毒によつて不幸に喘ぐ多くの人々を救う折伏がいかに大事であるかを、一人ひとりがいかに知らなければなりません。」と御指南になっておられます。(大日蓮・令和四年十月号)所詮、この無常世界の六道輪廻の苦しみから脱するには、御本尊様に対する絶対的な信を貫き通すことでもあります。一切衆生を成仏させるために、仏は究極の真実を法華経に明かされたのですから、法華経を信じ行ずることが、仏の本意に叶った修行であり、そして持妙法華問答抄(二九九頁)に「本意に叶はゞ仏の恩を報ずるなり」とある如く、御本尊様を信じて自行化他に亘る信行に励んで行くことが「仏の本意に叶った信心」になるのであります。

「報恩躍進の年」も残りわずかとなりました。何事においても気の緩みや心の隙、油断は失敗を招く大敵です。殊に大聖人が聖人御難事(一三九七)に「すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」と仰せのように、「たゆむ心」は魔につけ込まれてしまいます。私達には人々を一刻も早く救う重大な使命があるのです。いよいよ日々の唱題に真剣に励み、本年の折伏誓願目標を真剣に捉えて、全身全霊で実践して明年「折伏躍進の年」を迎えようではありませんか。(令和四年十二月度・御講の砌)